

## 日本語学習者のための「から」の語用論 — 接続助詞「から」と「ので」の適切な使用のために —

萩原 孝恵

チューラーロンコーン大学

### 要旨

接続助詞「から」には2つの機能が潜在している。1つは、接続の意味関係を表す機能、もう1つは、話し手の発話態度を表す機能である。そして、後者の機能は、使い方によって、前者の文法的・意味的機能をしばしば背景化してしまうほどの効力を発揮する。ところが、日本語学習者は、こうした「から」の特徴を知らずに「から」を使い、その結果、本人の意図しない意味や態度が伝わってしまうことがある。本稿では、こうした学習者の不利益な使い方を問題視し、語用論の観点から母語話者の使用法を検討することで、日本社会で、そして日本語表現として好まれる「から」と「ので」の使い分けとその判断基準を探った。また、会話教材にみられる「から」の使用法—すなわち母語話者が自然に身に付けている使用法—を分析・考察することで、学習者のための「から」と「ので」の使い分けチェック・シートを作成し、提示した。

【キーワード】 接続助詞「から」と「ので」、語用論的知識、対人関係的機能、[±主張性]

### 1. はじめに

<原因・理由>を表す接続助詞「から」には、「語用論」に則った運用ルールがある。この運用ルールは、日本語母語話者であれば自然に身に付けているものと想定(期待)され、日本社会で、そして日本語の表現方法として好まれる使用法をさす。

山内(2005: 7)は、《ACTFL 言語運用能力基準—話技能》に文化的な能力に関する記述がないために、「たとえば、『約束の時間に遅れて来たので、待ち合わせの相手に事情を説明して許してもらおう』というロールプレイを行った時に、遅れてきた事情説明はきちんとできているのに、謝り方が不十分なため、非常に違和感を覚える」ことがあると指摘している。そこで、こうした違和感の理由を考えてみると、これは「語用論的能力」の欠如、すなわち相手に違和感を与えないストラテジーの欠如なのではないかと思われる。たとえば、日本語学習者との会話の中で、何となく押し付けがましくて、何となく不自然な「から」の使用に出会った時である。それは、しばしば学習者<sup>(1)</sup>が何らかの<原因・理由>を表す内容を伝達したいと思う時に使用される(1)のような「から」である。

- (1) 先生、私は今週、試験勉強を一生懸命しましたから、宿題を出すのが遅れました。  
すみません。 (2009年12月: 学生発話より)

(1)の「から」の使用に文法的な間違いはない。文法的な側面から判断すれば、適格文である。言いたいことも理解できる。しかし、語用論の観点からみると非適格文である。理由は、前件が後件を引き起こすもともになった、あるいは後件は前件に依存して起こった<sup>(2)</sup>、

という話し手の発話態度が「から」の使用によって前面に押し出されるためである。

本稿は、学習者のこうした「から」の使い方をコミュニケーション上問題のある使い方として取り上げ、語用論の観点から適切な使用法を分析し記述する。本稿の構成は、まず次節で、接続助詞「から」が2層機能構造であるために、こうした問題が引き起こされることを提示する。次に3節で、「から」の文法的・意味的機能を先行研究をもとに記述する。4節では、これまで「ので」と対比させることによって、「から」が<主観的>か<客観的>かという見方で議論されてきたこと自体に困難さがあることを指摘し、5節で新たな判断基準を提案する。そして6節で、「から」の語用論的機能を「ので」と併せて記述する。7節では、前節までで明らかとなった「から」の語用論的機能を、母語話者がどのように会話教材の中で例示しているかを分析し、母語話者が身に付けている「から」の使用法を具体的に記述する。最後に、まとめと今後の課題について述べる。まずは、「から」に潜在する機能と運用上の問題を提示する。

## 2. 問題の所在

前節の例(1)で示したように、接続助詞「から」は、単に<原因・理由>といった意味関係を表すだけではない。実は、「から」には2つの機能が潜在していると考えられる。1つは、接続の意味関係を表す<テキスト構成的機能>、もう1つは、話し手の発話態度を表す<対人関係的機能>である<sup>(3)</sup>。そして、後者の<対人関係的機能>は、使い方によって、文法的・意味的機能である<テキスト構成的機能>をしばしば背景化<sup>(4)</sup>してしまうほどの効力を発揮する。たとえば、授業中に「寒い」と感じた日本人学生が教師に対し、(2a)と(2b)のように言った場合のそれぞれの学生の発話に抱く印象の違いがその効力である。

- (2) a. 学生：あの一先生、寒い(です)から窓を閉めてもいいですか。  
b. 学生：あの一先生、寒いので窓を閉めてもいいですか。

同様に、国際交流を目的とした立食パーティーで、主催者側の人日本人と外国人にそれぞれ寿司を勧めた場合を検討する。主催者側の人がいづつか寿司を皿に取り、「どうぞ」と勧めた場面で、日本人・外国人ともに(3)のような返答がなされたとしたら、寿司を勧めた側は相手に対してどのような印象を抱くであろうか。想定される1つの案として、日本人に対しては「そんなにはっきり言わなくてもいいのに」と配慮のなさや失礼さを感じ、外国人に対しては「外国人だから(仕方がない)」と容認する可能性である。

- (3) 私は生の魚は食べませんから。

すなわち、母語話者の(2)のような使用では、「から」を使った発言に自己中心的な発話態度や主張が感じられるのに対し、(3)のように、母語話者と非母語話者<sup>(5)</sup>の場合には、その受け取り方に違いが現れる可能性が考えられる。しかし、ここでもう一度、(1)の「から」の使い方立ち戻って考えてみると、(1)の内容を伝えたいと思う時、母語話者は「から」を果たして使うだろうか、という根本的な疑問が湧く。

母語話者は、＜原因・理由＞を表す「から」に＜対人関係的機能＞が表出することを直感的に知っているように思われる。すなわち、「から」を使用すると、話し手の意図や態度が前面に押し出され、配慮や丁寧さが欠けることを何となく認識しているということである。ところが、日本語教育の現場での指導・学習の興味は、どちらかといえば、文法・意味・発音などの正確さである。そのため、(1)～(3)に示したような、運用時に表出する話し手の意図や態度についてはほとんど留意されないように思われる。しかし、一見、論理的に前件と後件を結び付けたかのように思われる接続助詞に実は2つの機能があり、使い方によってその一方が前面に押し出される表現があることについてはもっと着目すべきであるし、語用論の観点から指導したり学習したりする必要があると考える。本稿で取り上げる「から」は、そんな表現の1つである。まずは、「から」の1つ目の機能である＜テキスト構成的機能＞から概観する。

### 3. 「から」の＜テキスト構成的機能＞

本節では、接続助詞「から」がどのように前件と後件を関係付けるかという＜テキスト構成的機能＞について概観する。

「から」の文法的機能について長田(1970: 80)は、「後件を『支配する』働きがある」とし、高橋他(2005: 166)は、「まえの文の内容をうしろの文に関係づける機能をもつ」と説明している。「から」の意味的機能については、三尾(1958: 260)が「から」の意味は「…ゆえに」で、「純粹に原因・理由を示す接続助詞」であると説明し、森田(1989: 349)は、接続助詞の「から」は「本来別個のものである二つの事柄を話し手が順々に認識し、それを『AであるからBなのだ』と、理由—結果の関係として主観的に結びつけている形式」であると、(4)のような例を挙げている。

(4) 今日は寒いから窓をしめましょう。 (森田 1989: 348<sup>(6)</sup>)

これらの記述から、「から」の＜テキスト構成的機能＞は、前件の＜原因・理由＞を後件の＜結果＞に関係付ける機能をもつ、と特徴付けることができる。ここでもう1つ注目しておきたい点がある。それは、その＜原因・理由＞が＜結果＞にどう結び付けられるのか、という問題である。この関係付け方について森田(1989)は、前出の通り、「主観的に結びつけている」と説明している。ということは、「から」は＜主観的＞なのだろうか。

### 4. 「から」は＜主観的＞か＜客観的＞か

「から」に対して＜主観的＞という見方を最初に提示したのは永野(1952)である。永野(1952)は、話し手の主観によって理由付けされる「から」と、話し手の主観を越えて客観的に理由付けされる「ので」を分類し、以後、永野説(1952)は多くの研究で援用されてきた(浅見, 1964; Nakada, 1977; 奥田, 1986; 森田, 1989; 今尾, 1991; 岩崎, 1995; 田中, 2004)。『大辞林<第二版>』でも、話し手の主観に基づく「から」に対し、客観的事実に基づく「ので」とその違いが説明されていることから、永野説が「から」の特徴として一般化されていることがうかがわれる。しかし、「から」を＜主観的＞、「ので」を＜客観的＞

>と簡単に片付けることはできない。それは、こうした見方とは反対の見解もあるからである。山下(1986)、牧野(1996)および Makino (2007)である。

山下(1986: 162)は、「から」は、「『話し手』が客観的事実に基づいて自ら判断をくだしたことを示す語」であるため、最終的な判断は聞き手や第三者にゆだねることなく自分で下すことがその特徴だとし、(5)のような「から」と「ので」の対比例を提示している。

- (5) a. 秘書：社長はまだ出社していませんから、お待ちください。 (山下 1986: 162)  
 b. チェッ、かわいげのない女だなア。オレはちゃんと約束どおり来たんだぜ。せめて、社長はまだ出社していませんので、お待ちくださいませんか、ぐらいいは言ったらどうだい…。 (山下 1986: 162-163)

山下(1986)は、(5a)のような言い方をされた聞き手が、(5b)のように腹を立てたのは、相手に判断の余地を与えない「から」と、相手に判断の余地を残す「ので」の特徴のためであるとしている。すなわち、(5a)の秘書の発話[「から」と「お待ちください」の使用]が、強制的な言い方となっており、その結果、相手に(5b)のような感情を引き起こさせた、と説明している。そして、「日本人の社会で『のだ / ので』を使わず、「から」一本やりでやっっていこうとすると、人間関係がギスギスしたものになってしまう」(p.162)と指摘している。

牧野(1996)は、「から」と「ので」の使い分けについて、「から」は、相手に働きかけるような<ソト向き>の表現であるのに対し、「ので」は、自然にその理由付けに引き込まれていく<ウチ向き>の表現である、と述べている。そして Makino (2007)では、下記(6)の文で「から」を使用した場合には、話し手は気が進まなかったけれどもチョコレートを買った、といった印象を与えるのに対し、「ので」を使用した場合には、自然に理由が提示されているような印象を与える、とその違いを説明している。

- (6) 今日はバレンタイン・デー [だから / なので] 彼にチョコレートを買ってあげる。  
 (Makino, 2007: 246<sup>(7)</sup>)

Makino (2007: 264)は、「から」を‘LOGOS-oriented’、「ので」を‘PATHOS-oriented’、と特徴付けている。しかし、実際には、上記の Makino (2007)の例(6)の「から」、「ので」の使い方から、どちらがより客観的で、どちらがより主観的なのか、を判断することは難しいように思われる。話し手が何かを伝えようとする時、「から」で表現するか、それとも「ので」で表現するかは、自分がおかれた物理的・心理的状況によって、そもそも主観的に選択されるものだからである。

たとえば、車検のために代車を借りていて、その代車にガソリンを入れなければならないような場合、「代車なので、5リットルで」というか、「代車だから、5リットルで」というかは、話し手の判断による。これは筆者の実体験で、筆者の場合には「ので」を無意

識に選択し発話したが、この場合、「代車だから、…」ということも可能であった。しかし、代車であるということを中心とするのではなく、筆者としては5リットルしかガソリンを入れないことの恥ずかしさや、少しのために手間をかける申し訳なさのような気持ちが咄嗟に働いたために「ので」を選択した、と当時の状況を振り返ることができる。あるいは、昼食時の会合で、すでに食事を済ませて参加している状況で「お昼は？」と尋ねられた場合、「もう食べましたので」というか、「もう食べましたから」というかは、話し手の判断・選択による。つまり、話し手は「から」と「ので」の使用を<主観>か<客観>かで選んでいるのではなく、<主張する>か<主張しない>かで選んでいると考えられる。そのため、従来通り<主観的 vs. 客観的>という分類でこうした使い方を分析しようとする判断が難しくなり<sup>⑧</sup>、前出したような相反する見方が現れても不思議ではないのである。そこで次節では、この相反する2つの見方を比較・検討し、新たな判断基準を提案する。

### 5. 新しい判断基準 [±主張性]

前節でみたように、永野(1952)によって示された<主観的 vs. 客観的>という分類は、これまで多くの研究で援用されてきた。しかし、何が主観で、何が客観なのか、といった判断は、それぞれ問題となる文の意味を通して記述・説明されてきたため、先行研究では、「から」を<主観的>だとみる説と、反対に<客観的>だとみる説が存在している。そして、このことは、主観か客観かという判断が難しく、人によっていかに異なるものであるかという問題を顕在化している。つまり、「から」が<主観的>か<客観的>かという判断は、問題となる例文によって、たとえ研究者であっても意見が分かれてしまうということである。そこでもう一度、「から」を<主観的>とみる立場と<客観的>とみる立場の両者の説明を検討し、新たな見方を探っていく。

これまで多くの研究で支持されてきた永野(1952)の<主観的><客観的>という枠組みを「から」と「ので」から取り払い、その違いを再検討してみると、前出した、一見相反する2つの説は、実は同じことを指摘していることに気付かされる。すなわち、「から」と「ので」の使用は、話し手が主張を前面に出すか出さないか、という判断基準に照らし合わせた上で、どちらを使用するかを選択すると考えられるのである。つまり、その判断基準とは、主張を前面に押し出してもよいと思う場合には「から」を、主張を控え目にしたい・控えめ風に装いたい、あるいは中立的な提示をしたいと思う場合には、「ので」を選択する、という話し手の選択である。

たとえば、Nakada (1977)、田中(2004)は、「から」を使用すると、自分本位で自己中心的な差し出がましさが表出すると説明しているが、「自分本位」「自己中心的」「差し出がましき」のいずれを採っても話し手の主張が前面に出ていると判断できることから、[+主張性]と記述できるし、牧野(1996)によって指摘されている、<ソト向き>の表現の「から」についても、<ソト>に発信されることから、[+主張性]が示唆される。また、山下(1986)の「から」は「相手に判断の余地を与えない」と特徴付けていることから、その主張性は強く、やはり [ +主張性 ] と記述できる<sup>⑨</sup>。

一方、「ので」の使用について Nakada (1977)、田中(2004)は、「ので」が使われることによって、自分の見解や意見を強く前面に押し出さないような印象を与えると指摘してい

ることから、[－主張性] という特徴が示唆される。また、牧野(1996)が記述している、自然に理由付けされるようなくウチ向き>の表現という見方も、いわゆる自分の主張を表に出さないようにする(装う)、[－主張性] の特徴があると考えられる。

田中(2004)は、「から」と対比される「ので」には、次の(7a)、(7b)のように、待遇的な配慮が働く用法、(7c)のように、聞き手との共有的な情報であるとみなされる用法、(7d)のように、案内文や通知文に多用される用法、(7e)のように、中立的な並列叙述を表す用法がある、と述べている。ここで田中の「ので」の例文と説明を概観しておく。

#### (7) 「ので」を使用した場合

- a. あなたの健康を損なうおそれがありますので、吸い過ぎに注意しましょう。
- b. 4時までに迎えに行かなければならないので、帰ってもいいですか。
- c. 虫が入ってくるので、ドアはきちんと閉めてください。
- d. …(略)…、誠に勝手ながら来月から変更させていただくことになりましたので、お知らせいたします。
- e. 本日お荷物をお届けに伺いましたが、ご不在でしたので、下記の通りとさせていただきますので、宜しく願いいたします。…持ち帰らせていただきましたので、ご連絡ください。

(田中 2004: 313-319<sup>(10)</sup>)

田中(2004)は、(7a)では、明言を避け、相手に選択肢を与えているかのような配慮が表され、(7b)では、話し手の意図ではないという控えめな態度が表される、と説明している。また、(7c)のように、伝達を目的とした内容で使用されると、前件については聞き手にもほぼ共有されている事態とみなされ、後件に警告・注意・助言の文がくることが多くなると指摘している。さらに、案内状や通知文などによくみられる(7d)のような形式では、個人的な意志とは関係がないといった事情を示した上でその対処を伝える配慮が表され、(7e)のような使用では、中立的な叙述であるという「中立性」(p.319)が示され、伝達情報が複数ある場合には「から」よりも「ので」の方が許容度が高い、と指摘している。

こうした田中(2004)の説明から、「ので」は、i.明言することを避ける、ii.話し手の意図を前面に出さないようにする、iii.話し手の意志ではないことを表す、iv.中立性を表す、といった特徴が浮かび上がり、「から」と対比される「ので」の<対人関係的機能>が明らかになる。そして、「ので」のこうした<対人関係的機能>を[主張性]という基準に照らし合わせてみると、i から iiiについては[－主張性]、ivについては中立であるという意味で[φ主張性]<sup>(11)</sup>が、「ので」の使用によって表されることになり、それが聞き手に対する配慮へとつながるのではないかと考えられる。ならば、(7)の「ので」文を、下記(8)のように「から」文に変更するとどうなるであろうか。本稿の目的はあくまでも「から」の使用法を明らかにすることであるので、前出した(7)の例文に「から」を代入し検証する。

#### (8) 「から」を使用した場合

- a. あなたの健康を損なうおそれがありますから、吸い過ぎに注意しましょう。
- b. 4時までに迎えに行かなければならないから、帰ってもいいですか。

- c. 虫が入ってくるから、ドアはきちんと閉めてください。
- d. …(略)…、誠に勝手ながら来月から変更させていただくことになりましたから、お知らせいたします。
- e. 本日お荷物をお届けに伺いましたが、ご不在でした i.から、下記の通りとさせていただきます ii.から、宜しく願いいたします。…持ち帰らせていただきました iii.から、ご連絡ください。(すべて筆者による変更)

(8a)から順にみていくと、まず(8a)のように「から」を使った場合、直接的なコメントになり、「吸い過ぎが健康を損なう」という話し手の意思をはっきりと伝えている、といった印象を聞き手に与える発話へと変化するように思われる。次の(8b)の場合には、「から」を使用することにより、話し手は自分の意見を主張し、自己主張の発話態度が表出するように感じられ、(7b)のように「ので」を使用した場合のような控え目な態度は感じられなくなると考えられる。そして(8c)の場合には、「から」を使用することで、「ので」の時のような相互的な発話ではなく、話し手の判断による、という発話態度が示唆される。また、(8d)のような案内文や通知文で「から」を使用した場合、配慮表現を示唆する「ので」のような印象は消え、(8c)同様、個人的な判断・意思を一方的に伝えるような、失礼な印象さえ与えるかもしれない。最後に、(8e)のように、もしも「から」を多用する宅配業者がいたとしたら、お客さんはどのように思うだろうか。まるで相手を責めているかのような印象を与えかねないと思われる。例えば、「あなたが不在だったから荷物を持ち帰った」という宅配業者の意思・態度が伝わり、お客さんの立場からすると、「責任はあなたにある」とでも言われているかのような気分になるかもしれない。特に(8e)の場合、その役割関係は「客」と「業者」という<利害関係>にあり、「ので」のようなく中立的>で<配慮>のある表現が社会的にも求められているからだと思われる<sup>(12)</sup>。

以上の検証から接続助詞「から」に潜在する語用論的な機能をまとめると、i.自己主張する発話態度が表出する、ii.控え目な態度は表れない、iii.個人的な判断・意思を一方的に伝えることになるため、時に失礼な印象を与える可能性がある、iv.相手を責めているかのような印象を与えることがある、といった<対人関係的機能>が明らかになる。こうした「から」と「ので」の<対人関係的機能>を明示するため、次節で併せて提示する。

## 6. 「から」の<対人関係的機能>

「ので」との対比から浮かび上がった「から」の<対人関係的機能>は、次頁の表1のようになる。<原因・理由>を表す文形式として類似している「ので」と併せて提示する。表1から、「から」の使用によって表出する<対人関係的機能>は5項目で、i~vのいずれの記述からも「から」を使用すると、単に<原因・理由>という前件と後件の意味関係を表すだけでなく、話し手のさまざまな発話態度が伝達されることが示されている。そして、その発話態度は、時に、内容を背景化するほど強い主張となって前面に押し出される場合もあるという点については、前出した(8)の例からも明らかである。そのため、こうした「から」の<対人関係的機能>を認識した上で使用するのとそうでないのとでは実際の

運用時に大きな差が出ると考えられる。そして、こうした認識の塊が、母語話者が自然に身に付けている「語用論的知識」だと考える。

表 1. 「から」と「ので」の〈対人関係的機能〉

〈対人関係的機能〉	から	ので
i. 自己主張の発話態度を示す	✓	
ii. 明言する	✓	
iii. 話しての意図を全面に押し出す	✓	
iv. 話しての意志である	✓	
v. 個人的な判断・意思を一方向的に伝える	✓	
vi. 控え目にする・控え目風に装う		✓
vii. 中立性をもつ		✓
viii. 聞き手に配慮する		✓

次に、こうした「から」と「ので」に関する「語用論的知識」が、実際に会話教材の中でどのように反映されているかを検証する。

## 7. 教材の会話例から学ぶ「から」の語用論

ここまでで明らかになったことは、「ので」の[－主張性][φ主張性]と、「から」の[＋主張性]である。配慮の「ので」に対し、主張が前面に押し出される「から」の場合、その使用法を誤ると意図していない意味が相手に伝わってしまう。ならば、「から」はどうか。本節ではこの問題を解決するために、母語話者の語用論的知識の参照という観点から、会話教材 6 冊 [『留学生のための初級にほんご会話』、『日本語集中トレーニング』、『なめらか日本語会話』、『日本語生中継(初中級編 1、2、中～上級編)』] の中で紹介されている「から」文を考察する。調査対象とする例文は、会話者間の関係がはっきりと示されている会話文の中の「から」の使い方である。分析の基軸は、会話者間の関係性で、当該分析により、母語話者が「から」を使用する際に無意識に参照している「語用論的知識」と「運用ルール」を検証することができると思う。

### 7-1 家族間いわゆる〈ウチ〉での使用

本項では、家族間を〈ウチ〉と捉え、家族間での「から」の発話文の例を会話教材より抽出し分析した。その結果、(9)～(13)に示したように、家族間では「誰」が「誰」に(網掛け表示)という家族間での上下関係に基づく制約はみられなかった。このことから、家族間〈ウチ〉での「から」の使用には、運用上の制約がないことが明らかになった。

(9) 【兄が スターウォーズの DVD を貸してほしいという妹に】

兄：あー、そうだなー。昨日貸したばかりだから、来週か再来週まで返ってこないと思うよ。 (『日本語生中継 初中級編 1』)

(10) 【弟が ヘアスタイルを変えた姉に】

弟：心配することないよ。似合ってるから。それに、前より、だいぶやせて見えるし。 (『同上』)

(11) 【母が うるさくしている子に】



母：お父さんが寝てるんだから、静かにしなさいよ。（『なめらか日本語会話』）

(12) 【遅く帰ってきたことを注意された娘が 母に】

娘：だって、電車の中で昔の友達に会ったりしたもんだから…。 （『同上』）

(13) 【そろそろマイホームが欲しいと思っている妻が あまり乗り気でない夫に】

妻：だいじょうぶよ。わたしが車で駅まで送り迎えしてあげるから。（『同上』）

一方、家族間での「ので」の使用例は一例もなかったことから、家族間では「から」を使用の方が自然であり、反対に、配慮を表す「ので」の使用は不自然であると想定されていることも明らかになった。次に、親疎・上下・利害関係間での使用法を分析する。

## 7-2 親疎・上下・利害関係間いわゆる<ソト>での使用

本項でいう親疎・上下・利害関係というのはいわゆる<ソト>での関係で、社会生活の中で、個個人がつくっている人間関係を想定している。また、<ソト>の関係では、通常、親疎・上下・利害の複数の関係が絡み合っていると考えられる。そして、こうした関係が1次的因子となって、まず「から」の使用の適切さ・不適切さを判断し、次に伝達内容が2次的因子となって、「から」の使用を決定する、といった手順が瞬時に踏まれていると想定される。本項では、<ソト>での人間関係の中で親疎を軸に、関係性のある関係から関係性のない関係へと、「から」の使い方を検討していくこととする。

最初に友人間での「から」の使用から検討する。調査した6冊の会話教材で提示されていた友人間での会話では、「から」が使用され、「ので」の使用は1例もみられなかった。特に、友人同士の場合、下記(14)のように後件に依頼の内容がくる場合でも「から」が使用されていた。例文では「誰」が「誰」に発話しているかが重要であるため、該当部分に網掛け表示をしている。

(14) 【ホテルの支払いについて友人さゆりが 友人に】

さゆり：いい？ごめんね。明日、銀行かどこかの ATM でお金降ろすから、もしカード、だめだったら、貸してくれる？（『日本語生中継 初中級編 2』）

しかし、知り合いや近所の人といった顔見知りの関係間では、利害が絡むと「ので」が使用される例が示されていた。たとえば、(15)のように、知り合い・近所の人といった関係間で利害が伴う場合、(15a)の依頼する側は、主張を控え配慮を示す「ので」を、(15b)の依頼される側は、その依頼を断る場合であっても、「から」が使用されていた。

(15) 【a.依頼する側が 知り合いに】 【b.依頼される側が 知り合いに】

a：大森さん、ちょっと車貸してもらえますか。近くの郵便局に行くので。

b：あー、今日はバスなんです。妻が使うっていうから。

（『日本語生中継 初中級編 1』）

一方、利害因子が伴わない知り合い・近所の人との会話では「から」の使用が多く、あまり主張したくない気持ちが働いているような場合には「ので」の使用もみられた。また、間接的な知り合い、たとえば息子の友達や夫の勤め先の学生といった関係間での使用では「から」の使用例が示されており、こうした使用法は、上下関係と伝達内容から判断されていると考えられる。いずれにしても、当該関係間では、利害の絡む「ので」の使用例を除き、話し手自身の選択による使い分けが例示されていたと分析できる。

次に職場での「から」の使用法を検討する。職場では、親疎関係の<親>寄りにある同僚同士では、当該関係に上下関係という関係因子が加わったとしても「から」が使用され、親疎関係で記述できない次の(16)のような同僚間でも「から」が使用されていた。

(16) 【出張について同僚みどりが 同僚高橋に】

高 橋：きのうは、出張、たいへんでしたね。疲れたでしょう。

みどり：ええ、ちょっと。日帰りでしたから。（『日本語集中トレーニング』）

一方、職場が同じであっても、下記(17)のように部署が異なり、かつ依頼するなどの利害が伴う場合、依頼する側は(17b)のように「ので」を使用し、利害が伴っても職場での上下関係がある場合には、利害関係よりも上下関係の方が優先され、(18a)のように部下である依頼される側が「んで(ので)」を使用し、(18b)のように上司である依頼する側が「から」を使用する例が示されていた。同様に、先輩が依頼する場合にも「から」が使用されていたことから、(18)の例で確認できるように、職場では[上下>利害]の因子関係が「から」の使用を決定付けていることが示唆される。ただし、(19)のように、前件に個人的な理由がくる場合には、主張を控えた配慮を表す「ので」の使用が示されていた。

(17) 【a.総務の女性が 社内社員山口に】【b.社内社員山口が 総務の女性に】

a. 女の人：さっき始まったところですから、時間がかかるんじゃないかと思うんですが。

b. 山 口：そうですか。じゃあ、すみませんが、予算のことで山口から電話があったと伝えていただけますか。午後また電話しますので。

（『日本語生中継 初中級編2』）

(18) 【a.部下森下が 上司福島に】【b.上司福島が 部下森下に】

a. 森下：はあ。じゃ、妻に予定、聞いてみますんで。もう少し、待ってもらえませんか。

b. 福島：いいよ、いいよ。返事はいつでもいいから。

（『日本語生中継 中～上級編』）

(19) 【同僚大木が 同僚三橋に】

大木：子供が熱出しちゃいまして、病院に連れて行かなくちゃいけないので、ちょっと遅くなるかもしれないんです。（『日本語生中継 初中級編2』）

さらに、次のような状況では、前件におかれる理由によって「から」と「ので」が使い

分けられる。(20)では「から」、(21)では「ので」が使用されている理由を分析する。

(20) 【カフェでのアルバイト希望者山口が 当該カフェ店長に】

山口：はい。じゃ、明日履歴書を持ってきます。このカフェすてきだから、こんなところで働いてみたいなって思ってたんです。

(『日本語生中継 初中級編1』)

(21) 【会社の面接で就職志願者である学生が 面接官に】

学生：はい。私は大学では美術学部の建築学科に在籍しているので、住宅の設計やデザインに大変興味を持っています。えっと、…(略)。

(『日本語生中継 中～上級編』)

アルバイトを希望する(20)の「から」の使用は、「すてきなカフェだから、働きたいと思った」「働きたいと思った理由は、すてきなカフェだからだ」と、相手側の利点を理由として挙げ、話し手の意思・態度を表している。これは、「から」のもつ<対人関係的機能>を効果的に利用している使用法といえる。一方、(21)では、面接官に志望理由を述べる際に、主張を控える「ので」が使用されている。しかし、仮にこの学生が、「在籍しているから…興味を持っています」と面接官に言ったとしたら、どうであろうか。就職希望者が大学で建築学科に所属しているという個人的な理由が前面に押し出され、冒頭(1)の例でみたような、押し付けがましきや自分本位な印象を相手に与えてしまうように思われる。この(20)と(21)の例を通して明らかになることは、個人的な理由を前件におく場合には、主張を控え配慮を表す「ので」の使用が日本語の表現として好まれる、という母語話者の認識を示している点である。

また、「予防接種をしましたから、今日はお風呂に入らないでください」のように医者が患者に理由を説明する時、「受付は3時までですから、必ずそれまでに来てくださいね」のように規則などを説明する時、「これにしますから、包んでください」のように客が店員に言う時には、「から」の使用が示されていた。これは、上下・利害の関係因子が「から」の使用を選択したものと判断されるが、こうした場面でも、話し手が意思や態度をはっきり示したくないような場合には「ので」が選択されると思われる。

さらに、苦情を言う時、たとえば「ここ、みんなの公園なんですから、ちゃんとゴミは持って帰られたほうが…」(『日本語生中継 初中級編1』)、道でうっかりぶつかってしまって謝る時、たとえば「すみません。ぼんやりしてたもんですから」(『なめらか日本語会話』)、電車で席を譲る時、たとえば「いえいえ、わたしは次の駅で降りますから」(『なめらか日本語会話』)のような「から」の使い方も示されていたが、こうした場面でも、やはり話し手の判断によるものと考えられる。

しかし、以下のような状況では「から」の方が「ので」よりも適切な使用法となる。それは、次頁(22)のように切羽詰まった事態に直面している時、(23)のように相手にとって価値のある情報を勧める時、(24)のように相手にとって有用な情報を伝える時である。そして、こうした状況下では、友人・知り合い・同僚・職場などの関係間で作用していた[親疎>上下>利害]といった1次的因子の優先順位が逆転し、[利害>上下>親疎]とい

った優先順位に変化することが、(22)～(24)の使用例から示唆される。

(22) 【終電に乗り遅れてしまった女子高生が 警官に】

女子高生 1: 千円でいいんです。さいふに千円残ってますから。

警 官 1: ちゃんと返してくれるのかい？

女子高生 2: 明日の朝、一番に持ってきますから。 (『なめらか日本語会話』)

(23) 【旅行会社の社員が 客に】

社員: それに、温泉もありますし、民宿ですから、おいしい家庭料理が食べられますし、地酒も飲めますよ。 (『日本語集中トレーニング』)

(24) 【衝突事故があったことと渋滞との関連について運転手が 乗客に】

乗 客: 衝突事故？

運転手: ええ、でも、朝 7 時ぐらいだったから、今、10 時でしょ。もう 3 時間もたってるから、その事故のせいだけだとは思えないんですけどねえ。

(『日本語生中継 中～上級編』)

(22)は、上下関係でいえば警察官は女子高生にとって目上である。しかし、終電に乗り遅れてしまった女子高生にとって帰宅できないことは緊急事態であるため、こうした状況下では主張性のある「から」が使用され、(23)と(24)も、上下関係でいえば客が目上だと思われるが、相手にとって価値のある情報を伝える時には主張性のある「から」が使用される、といった例が示されていた。本来、「ので」を使うのが妥当かと思われるような関係性であっても、緊急事態や相手に価値のある情報を伝えるような場面・状況では、主張性のある「から」が使われることが例示されていた。

以上の検証から、<ソト>での「から」の使用法は、友人間では「から」、知り合い・近所の人との間でも基本的に「から」だが、後者で利害が絡んだり、あまり主張したくないと話し手が思う場合には「ので」が選ばれていることがわかった。しかし、職場関係では、利害よりも上下関係の方が優先され、立場が上の者が「から」、下の者が「ので」が使用されていること、また、個人的な理由を述べる場合には「ので」、指示・規則の説明・緊急事態・苦情など、自らの主張を明示したい場合には「から」が使用されていることが、母語話者の使用法として示された。

本研究では、会話教材にみられる「から」と「ので」のこうした使い分けこそが、母語話者の「語用論的知識」の表出と捉え、次項で、母語話者が直感的に有していると思われる「語用論的知識」を整理した質問形式のチェック・シートを再編し、提示する。

### 7-3 「から」と「ので」の使い分け

本項では、会話教材で提示されていた「から」の使用例から、母語話者が「から」と「ので」をどのように使い分けているかをチェック・シートにまとめ、次頁に表 2 として提示する。

表 2 は、話し手を軸とした<ウチ>から<ソト>への人間関係で、A から順番に Yes / No 形式で答えていくことで、「から」の使用がよいか「ので」の使用がよいか、が選べるよう

になっている。母語でない言語の微妙なニュアンスや語用論的観点からみた場合の、日本語として好まれる表現の仕方を学ぶには、こうしたチェック・シートの活用も、指導・学習上の一助になるのではないかと考える。

表 2. 「から」と「ので」の使い分けチェック・シート

社会	質問事項	Yes/No	オプション	アドバイス
ウチ	A. 家族ですか？	Yes →	から	「から」が自然 「ので」は不自然
		No →	B へ	
ソ	B. 友人ですか？	Yes →	から	「から」が自然 「ので」は不自然
		No →	C へ	
	C. 知り合い・近所の人ですか？	Yes →	C-1 へ	「から」で OK
		No →	D へ	
	C-1. 普通のおしゃべりですか？	Yes →	から	「から」で OK
		No →	C-2 へ	
	C-2. 何か依頼（お願い事・頼み事など）をしますか？	Yes →	ので	「ので」がよい
		No →	C-3 へ	
	C-3. 相手に配慮を表したいですか？	Yes →	ので	「ので」がよい
		No →	C-4 へ	
C-4. はっきりと言いたいですか？	Yes →	から	「から」がよい	
	No →	C-1,2,3 へ戻る		
ト	D. 先生・先輩・年上の人ですか？	Yes →	ので	「ので」がよい
		No →	E へ	
	E. 後輩・年下の人ですか？	Yes →	から	「から」で OK
		No →	F へ	
	F. 職場ですか？	Yes →	F-1 へ	「から」 / 「ので」
		No →	G へ	
	F-1. 親しい同僚ですか？	Yes →	から	「から」で OK C-2,3,4 へ戻る
		No →	F-2 へ	
	F-2. 同期ですか？	Yes →	から	「から」で OK C-2,3,4 へ戻る
		No →	F-3 へ	
F-3. 先輩ですか？	Yes →	ので	「ので」がよい	
	No →	F-4 へ		
F-4. 上司ですか？	Yes →	ので	「ので」がよい	
	No →	F-5 へ		
F-5. 部下ですか？	Yes →	から	「から」で OK	
	No →	F-1,2,3,4 へ戻る		
G. 見知らぬ人ですか？	Yes →	C-1,2,3,4 へ	「から」 / 「ので」	
	No →	C,D,E,F へ戻る		
H. 緊急事態ですか？	Yes →	から	「から」がよい	
	No →	C-1,2,3,4 へ		

## 8. まとめと今後の課題

本稿では、＜原因・理由＞を表す接続助詞「から」に2つの機能が潜在しているために、学習者の「から」の使用に問題がみられる事例を挙げ、母語話者の「から」の使用を語用論の観点から分析・考察することで、母語話者が身に付けている「から」の使用法を検討した。そして、「から」は、「ので」との使い分けがポイントであるが、その使い分けのカギは、話し手が当該発話(伝えたいと思う内容)を聞き手に＜主張する＞か＜主張しない＞かが判断基準となっているという見方を示した。また、母語話者が表現を選択する際に無意識に参照していると想定される「語用論的知識」を明らかにするため、会話教材に出てくる「から」文を対象に、会話者間の関係を軸に考察し、「から」と「ので」の使い分けチェ

ック・シートを、母語話者の「語用論的知識」の具体的な内容として提示した。

今後は、語用論的機能が前景化しやすい他の表現へと対象を広げ、母語話者の使い方を通して、日本社会や日本語表現として好まれる使用法を検討し、それを基礎研究として日本語教育の現場指導や学習への応用を図っていきたいと考えている。

## 注

- (1) 「日本語学習者」を以後「学習者」と呼ぶ。
- (2) 前田(2000) p.301 を援用。
- (3) 詳しくは萩原(2009) 4.4 を参照されたい。
- (4) 「背景化」というのは認知言語学を視座とした捉え方である。たとえば、「から」の論理的関係を表す機能が「因」となって前景化される場合、話し手の意図(発話態度・感情・意思など)を表す機能は「地」となって背景化されると捉える。これは、メイナード(2004: 204)が「だから」の論理関係について、「だから」には「論理的関係を前景化する場合」と「感情的な側面や対人関係を前景化する場合」とがあるという見解を視座とし発展させたものである(萩原, 2009 参照)。
- (5) 以後「日本語母語話者」を「母語話者」、「日本語非母語話者」を「非母語話者」と呼ぶ。
- (6) 下線は筆者による。
- (7) Makino (2007)の原文では、例文はすべてローマ字表記である。
- (8) 永野(1952)によって提案された<主観的 vs. 客観的>という捉え方には、岩崎(1995)も2つの疑問を投げかけている。1つは、「前件・後件の結びつきが主観的 / 客観的というのはどういうことを意味するのかがはっきりしないためノデ / カラに関するあらゆる現象がその特徴づけに帰されてしまう」(p.509)点、もう1つは、「主観的 / 客観的の区別の意味するところがまた漠然としていて如何様にも(拡大)解釈でき、永野論文以降の研究の主観 / 客観の区別の代案の多くが結局主観 / 客観の区別に還元できてしまう」(p.510)点である。
- (9) 萩原(2009)は、「から」の[主張性]について、因果関係を表す「から」の前件には「だから」の「だ」がすでに潜在しているために「から」にも[主張性]が表れるという見方を、佐久間(1952)の例を援用し示している。
- (10) 田中(2004)の a~e の各例文は pp.313-319 からの引用である。また(7e)の「ので」について田中は、最初の2つは「原因理由」を表し、最後の「ので」は「状況指示の機能」を表していると説明しているが、本稿の目的は「から」の特徴を明らかにすることであるため、「ので」については言及しない。
- (11) 「 $\phi$ 」は、主張性がプラスでもマイナスでもない、「中立」を表している。
- (12) 徳永美暁氏より、「配慮表現を示唆する『ので』に対し、『から』を使用すると、本文中の破線に記したような印象が現れるのはなぜか」とのご指摘をいただき(p.c., 2009)、Brown & Levinson(1987)の「ポライトネス理論」を参照した。すでにこの理論を土台とした「から」と「ので」の分析は山本(2001)が行っており、山本(2001)は「から」と「ので」の使い分けには「丁寧さ」のストラテジーが根底にあり、「から」は「積極的な丁寧さ」、

「ので」は「消極的な丁寧さ」だと結論付けている。しかし、自然発話で使用される「だから」(筆者は「から」は「だから」の一部でありその特徴も重なっていると考えている)を例にとると、「から」は常に「ポジティブ」に働くわけではなく、中には「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」(山本のいう「消極的な丁寧さ」)として機能している使い方もあった(萩原, 2009)ことから、実際の使用では、会話相手との関係、伝達内容、場面/状況(空間的・心理的)といったさまざまな因子が複雑に絡み合っている使用されていると考える。

### 調査資料

『留学生のための初級にほんご会話』(スリーエーネットワーク)、『日本語集中トレーニング』(アルク)、『なめらか日本語会話』(アルク)、『日本語生中継 初中級編 1』、『日本語生中継 初中級編 2』、『日本語生中継 中～上級編』(くろしお出版)

### 参考文献

- 浅見徹(1964)「カラとノデ」時枝誠記・遠藤嘉基(監), 森岡健二・永野賢・宮地裕・市川孝(編)『講座現代語 6 口語文法の問題点』293-298. 明治書院.
- 今尾ゆき子(1991)「カラ、ノデ、タメーその選択条件をめぐって」『日本語学』第 10 巻 第 12 号, 78-89. 明治書院.
- 岩崎卓(1995)「ノデとカラー原因・理由を表す接続助詞」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下)複文・連文編』506-513. くろしお出版.
- 奥田靖雄(1986)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文ーその体系性をめぐって」『教育国語』87, 2-19. むぎ書房.
- 佐久間鼎(1952)『現代日本語法の研究』恒星社厚生閣.
- 高橋太郎・金子尚一・金田章宏・齋美智子・鈴木泰・須田淳一・松本泰丈(2005)『日本語の文法』ひつじ書房.
- 田中寛(2004)『日本語複文表現の研究ー接続と叙述の構造ー』白帝社.
- 長田久男(1970)「接続詞小辞典」『月刊文法』第 2 巻第 12 号, 79-80. 明治書院.
- 永野賢(1952)「『から』と『ので』はどう違うか」『国語と国文学』29-2, 30-41. 至文堂.
- 萩原孝恵(2009)『「だから」の語用論ーテキスト構成的機能から対人関係の機能へー』昭和女子大学大学院博士学位論文(未公開).
- 前田直子(2000)「現代日本語における原因・理由文の三分類」山田進・菊地康人・靱山洋介(編)『日本語 意味と文法の風景ー国広哲弥教授古稀記念論文集ー』ひつじ書房.
- 牧野成一(1996)『NAFL 選書 12 ウチとソトの言語文化学ー文法を文化で切るー』アルク.
- 三尾砂(1958)『話しことばの文法』法政大学出版局.
- メイナード, S. K. (2004)『談話言語学』くろしお出版.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店.
- 山内博之(2005)『OPI の考え方に基づいた日本語教授法ー話す能力を高めるためにー』ひつじ書房.
- 山下秀雄(1986)『日本のことばとところ』講談社.
- 山本もと子(2001)「接続助詞『から』と『ので』の違いー『丁寧さ』による分析ー」『信州大学留学生センター紀要』第 2 号, 9-21.
- Brown, P and Levinson, S.(1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. (Studied in Interactional Sociolinguistics 4) Cambridge: Cambridge University

Press.

Makino, S. (2007) "An Argument for Non-arbitrary Relationship between Sound and Meaning in Japanese Grammar." In: Ikegami, Y., Eschbach-Szabo, V., and Wlodarczyk, A. (eds.) *Japanese Linguistics: European Chapter*, 239-250. Tokyo: Kuroshio.

Nakada, S. (1977) "Kara and Node revisited" *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, Vol.XII, No. 2 & 3, 249-279.

**付記** 本稿は、萩原(2009)の一部を修正・加筆し、日本語教育へ応用したものである。